

シルバー人材センターで活躍の場を

これからのシルバーライフのために、健康管理をしながら、生きがいをもって働ける場を提供するシルバー人材センター。

鹿屋市シルバー人材センターでは、60歳以上の健康で働く意欲のある会員を募集しています。

●仕事内容

調理、刈払い、農作業、除草、一般事務、駐車場管理、介護 など

●報酬

従事した仕事に応じて、センターが分配金を支払い

●入会説明会

○会場 第2金曜日 串良支部

第4金曜日 鹿屋本部

○時間 9:00～12:00

鹿屋市シルバー人材センター

Tel 0994-40-3382

INTERVIEW



あかさか かずお
赤坂一男さん
(82歳、田崎町)
昭和11年3月生まれ

センターの仕事で体も心も健康に

64歳でサラリーマンを辞めて1年後ぐらいに、鹿屋市シルバー人材センターに入会しました。入会后間もないころは草取りなどの作業をしましたが、しばらくして剪定の講習を受けて以来、剪定を中心に作業を行っています。

以前は班を組んで現場に行っていました。80歳を超えた今は、自分のペースでできるよう、センターが調整してくださっています。今でもお客様(依頼者)に納得してもらおう仕事をすることをモットーにしています。

就業先では仲間やお客様との会話が楽しく、体だけでなく心の健康にもいいですね。センターへの仕事の依頼は年々増えているようですが、人手が不足していると聞きます。もっと多くの方が会員になってくれたらと思います。



自宅近くの田んぼに毎日通う日々

おだ てるあき
大迫 暁さん(90歳、上高隈町)
昭和3年5月生まれ

米作りを生きがいにして

2年前の台風16号で田んぼが被害を受け、米を作ることがしばらくできませんでした。今年ようやく稲の苗を植えることができました。60年ほど前から米作りをしています。現在の面積は約2反。この年齢で米を作っている人は、近辺ではほかにいないと思います。自分で作って食べる米はおいしいですね。体力づくりのため、毎日、自己流の体操を続けています。足腰は丈夫なほうで、70代までよく長距離を走っていました。稲はすくすく伸びています。収穫が楽しみです。

これまでの 経験 と 技。これからも。

戦前・戦中の激動の社会を生き抜き、はかり知れない苦労を味わうとともに、今ではふれることができない豊かな経験を積んでこられた高齢者の皆さん。ここでは、今もなお現役として活躍されている、私たちの先輩を紹介します。



慣れた手つきで牛を引く

とくども よしお
徳留義徳さん(88歳、吾平町下名)
昭和5年3月生まれ

健康でいられるのは牛がいるお陰

25歳の時から牛を飼っています。現在は5頭ですが、多い時には16頭いました。平成9年に岩手県で行われた「全国和牛能力共進会」で出品牛が農林水産大臣賞を受賞。これで元気をもらったから今でも続けられているのだと思います。平成24年から4年間は、「吾平町肉用牛老いどんが倶楽部」というグループの会長も務めていました。昨年は市民表彰を頂いたのですが、まだまだ頑張らないといけないと気合いを入れています。健康面は特に意識していませんが、やはり牛がいるから健康なのだろうと思っています。



自慢の作品「極寒の炭小屋」の前で

たじり まさひこ
田尻 正彦さん(94歳、大手町)
大正13年3月生まれ

晴れの日には猟、雨の日には水墨画

終戦後、23歳で鹿屋に住み始めて間もなく狩猟免許を取得しました。兵隊時代に鉄砲は扱っていたので、猟は自然の流れでした。もう20年以上、「鹿屋市猟友会」の会長を務めています。

天気の良い日は、ほぼ毎日、朝4時半ごろに猟に出ます。山へは軽トラで行くので多くても2人。1人で行くこともしばしばです。野山を500m近く歩きますね。

雨の日は、自宅で水墨画を描いています。もともと絵を描くのが好きで、仕事を辞めた後、72歳から習いました。北海道で炭俵を運ぶ人を描いた「極寒の炭小屋」が、平成21年、「全国公

募日美展 総合水墨画展」で優秀賞を受賞した時は、大変うれしかったですね。今は市中央公民館で講師として、ここ10年ほど、市民の皆さんに水墨画の楽しさを教えています。

若い時に貧乏をして苦労を経験したため、地域に恩返ししたいという気持ちを持って生きてきました。有害鳥獣の捕獲やパトロール、水墨画の普及も、少しは皆さんの役に立っているのかなと思います。

猟友会には昭和6年〜8年生まれの子もいますが、もちろん、皆、年下ばかり。まだまだ誰にも負けない気持ちで、体力が続く限り頑張ります。



教室には教え子たちの写真が並ぶ

こうの よしゆき
河野 良幸さん(87歳、串良町岡崎)
昭和5年11月生まれ

「書」で子どもたちの心の成長を

金融機関を定年退職後に開いた書道教室を、もう30年以上続けています。それは小さいころからの夢でした。

戦時中、小学校の教師で出征していた兄の毛筆の伸びやかな書体に憧れ、戦争から帰ってきたら直接教えてもらおうと待ちわびていましたが、戦地で命を落しました。自慢の兄でした。

父が私が7歳の時に他界したため、暮らしは貧しかったですが、地域の大人たちの温かい言葉に何度も励まされました。教員への道は断念しましたが、そんな幼少の経験を通して、いつしか書道で子どもたちに関わり、地域に恩返ししたいと思

うようくなりました。今は自宅横の教室のほか、保育園や障がい者施設等で指導に当たっています。子どもたちには、技術的なことより前に、「心で書く」ことを説いています。

独学で書道を学んだ私の教室ですが、全国レベルの書道展で活躍する教え子がたくさん出ています。

夢があったので、これまで無我夢中でやってきました。どんな苦労があっても、昔の体験があるから、頑張ることができ、前向きになれる。これからのため、地域のため、子どもたちのためにやることはたくさんあります。まだまだ現役です。